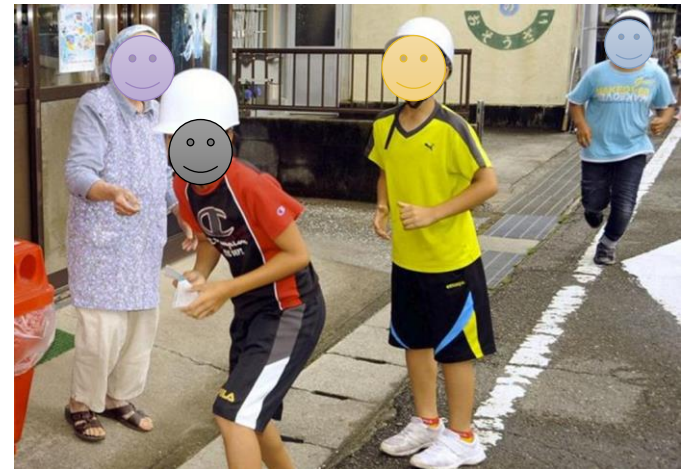


2024年11月5日
令和6年度「津波防災の日」
スペシャルイベント

「能登半島地震、南海トラフ地震臨時情報発令等を踏まえた津波への備え」

津波避難の迅速な初動を促すための
「津波てんでんこ」の**実践**を考える

岡田夏美
京都大学防災研究所 特任助教



能登半島地震(1月1日)時の、避難の初動

YOL 読売新聞 オンライン 朝刊記事 紙面ビューアー 社説 English Q ?

三すべて | トップ 速報 社会 政治 経済 スポーツ 国際 地域 科学・IT エンタメ・文化 ライフ 受験・就活 ヘル

東日本大震災 特集トップ ニュース 企画・連載

能登地震発生5分後、高台へ向かう動き...津波避難の教訓生きる

日本経済新聞

能登避難、3.11より早く 大津波警報前に初動8割
チャートは語る

- 多くの人が迅速に避難したことがわかる。
- しかし、お正月で、すなわち「家族が一緒にいる可能性が高かった」日でもある。
- そのために、家族一緒に避難することができた状況も多かったのではないだろうか。
(もちろん、そうではないパターンも多かったことは想定できる)
- 家族がバラバラの場所にいるときにもこういう迅速な避難はできるだろうか・・・？

津波てんでんこ

- 三陸地方に伝わってきた、伝承
- 正確な起源はわからないが、世間に広まるきっかけを作ったのが、津波研究家の山下文男氏（1924年生）。
- 明治の三陸大津波（1896年、明治29年）を生き抜いた山下氏の父親が、昭和の三陸大津波（1933年、昭和8年）のときにとった行動に由来する。この山下氏の父親も、その祖父からこの言葉を聞いたという。
- 少なくとも100年を超える歴史を持つ言葉。
- 1993年の北海道南西沖地震、2011年の東日本大震災などを経て、この言葉の重要性が再注目されている。

① 自助原則の強調

「自分の命は自分で守る」

② 他者避難の促進

「我がためのみならず」

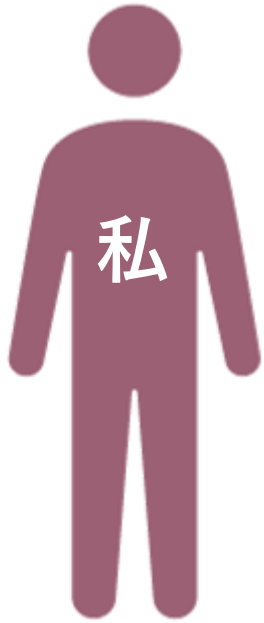
③ 相互信頼の事前醸成

「あなたも逃げて助かっているはずだから、自分も逃げて助かる」

④ 生存者の自責感の軽減

「あなたはきっと最大限頑張ったはずだが、それでもどうしようもないことが起こってしまったのだ」

「津波てんでんこ」が発動するためには

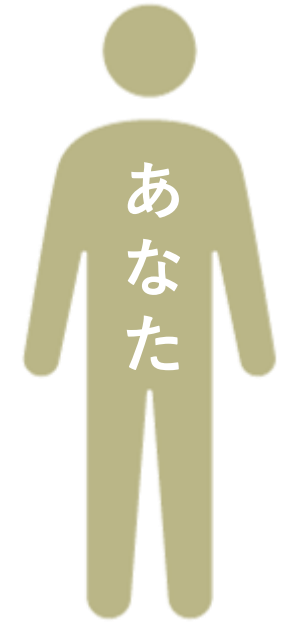


あなたが「てんでんこ」することを私は信じている
(そうでないと、私も「てんでんこ」できない)

私が「てんでんこ」することを、あなたは信じている
(そうでないと、あなたは「てんでんこ」できない)

「あなたが『てんでんこ』することを、私は信じている」と、
あなたは信じている
(だから、2人とも安心して「てんでんこ」できる)。

「私が『てんでんこ』することを、あなたは信じている」と、
私は信じている
(だから、2人とも安心して「てんでんこ」できる)。



.....

発災前に、こうした認識の下準備が必要

お互いに大事と思っている人同士の信頼関係…

- 東日本大震災時における著名な釜石の事例(片田,2012)では…
発災時の避難行動は、もちろん高く評価されるべき。
しかし、それよりも前に、8年間にわたって**津波防災教育が繰り返し実施されてきた過程がより重要**。
8年の間に大切な人同士の間で**信頼関係**が築けていたからこそその結果だったと考えられる。

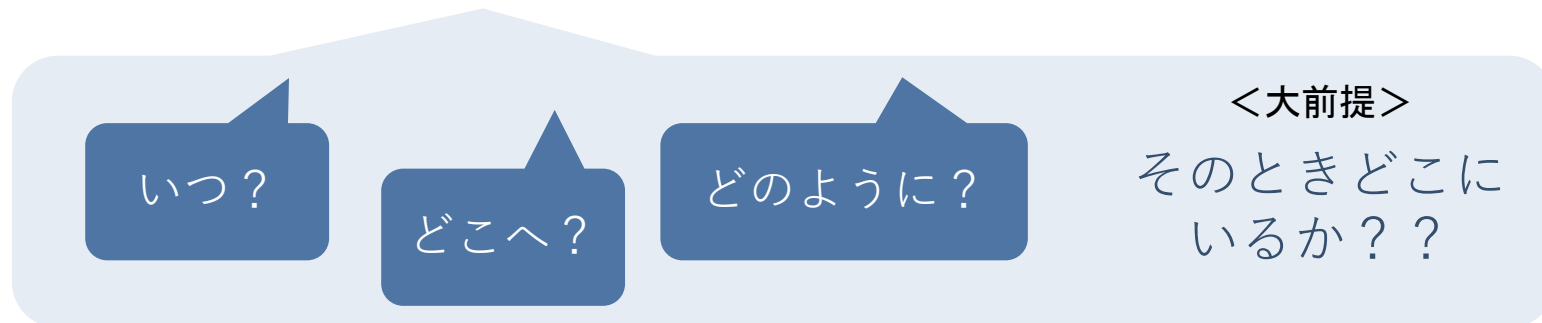
片田(2012):人が死なない防災、集英社新書

- 適切な避難行動に対しては、お互いの信頼関係（認識共有）の有無が重要であり、そのために、家庭で避難方法について相談しておくことが、子どもの適切な避難を選択することにつながる

金井・上道・片田(2018):児童生徒とその保護者を対象とした“津波てんでんこ”の促進・阻害要因の検討、災害情報

そうはいつでも…

津波避難のための認識共有のためには…



つまり、考えるべき、前提となる条件が多くて難しい!

信頼をどうやって形成するのか？

一般的に考えると、「**会話**」を中心とした親子間の日常的なやりとりから形成をめざせそう

どのように会話する？

どのような内容が望ましい？

その会話で導き出される結論は？

親子の津波避難の認識に関する実態調査

【研究対象地】
高知県黒潮町

【研究対象】
「親子」
町内の大方児童館の子ども会の活動に参加する、
子（小学生）とその親（母親もしくは父親）の2人ペア



【黒潮町の防災】

- 34.4mの津波想定：“新想定”で日本一の高さ
- 日本一の高さの津波避難タワー
- 全町をあげて「犠牲者ゼロ」を目標とするハード対策の整備、ソフト対策の充実
- 町内で一貫した防災教育カリキュラム構築

親と子への調査

【研究①】

親子の津波避難の認識に関する実態調査:18ペア

親と子に、別々に「避難に関する認識」について調査



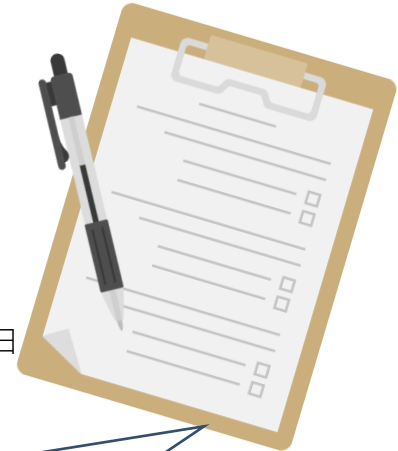
「家に一人にいるときに地震が起こったら、どこに逃げるか決めていますか？」

「どこに避難するかを、お家の人は知っていますか？」

対面で聞き取り
(実施期間：2021年10月5日～19日)



アンケート調査
(実施期間：2021年10月13日～27日
2022年1月24日～2月15日)



「放課後など、子どもが一人にいるような場合、子どもが一人で避難する先を一緒に決めていますか？」
「①決めている（場所）、②これから決める（場所）」

【研究②】

親子への聞き取り調査:10ペア

(実施日：2022年7月30日、10月8日、10月15日)

①の調査の18の親子ペアから10ペアの協力

各ペアを個別に集めて、①の調査結果を導入として活用して、それについてどう考えるかについて「会話」してもらった。



親と子の認識の一致・不一致

調査①の結果を分類	お互いが避難すると思っている場所が一致している	お互いが避難すると思っていない場所が一致していない
避難場所を親子で決めているという認識が一致している	A：6ペア	B：7ペア
避難場所を親子で決めているという認識が一致していない	D：1ペア	C：4ペア

「信頼関係（認識共有）」という観点に立つと、**Aのペア（完全一致）**には何の問題もないように見える・・・

BとCのペアは認識が異なったり、避難すると思える場所が異なるので、一番解決が優先される・・・？

Dのペアは認識も場所も違うけれど、結果として避難先で出会えると想定することができるので安心・・・？

- A：避難場所を親子で決めているという認識も、お互いが避難すると思っている場所も一致している
- B：避難場所を親子で決めていると認識しているが、お互いに避難すると思っている場所が異なる
- C：避難場所を親子で決めているという認識が一致しておらず、お互いが避難すると思っている場所も異なる
- D：避難場所を親子で決めているという認識は一致していないが、お互いが避難すると思っている場所は一致している

→この中から、10ペアの協力を得て、対面で【研究②】を実施。3つの事例を紹介。

「会話」の内容-その①-

正確な場所(言葉)の共有は、かんたんにいかない...

もしここ(児童館)にいたらどうする？

どこに行く？

どこやろ？

一番近いのは？

ここの高台と、こっち側のタワー？

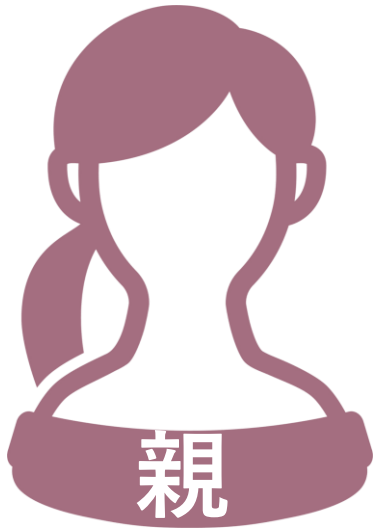
高台ってなに？タワーのこと？

うん

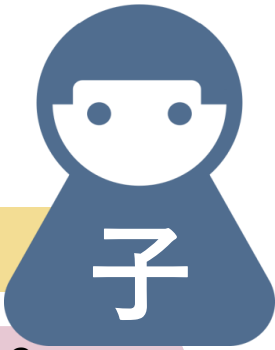
Sの方？こっちのMの方？

保育園のどこ？前の？

か、A？



「会話」の内容-その②-



子どもが心に秘めた、“本当の思い”

数字は発話の順番

家にそのままいるの？それともN公園まで行くの？ 1

家

2

なんでなんか、言わんでいいの？
飼ってる犬が心配みたいで、やけん犬を1回
連れてからM公園に逃げたいらしいです。7

岡田

家おる？

3

そうなんですね！なんやー教えてよー恥ずかし
かった？そっか、犬が1匹？ 8

かたくなやね（笑い）
かたくな。それ昨日聞いたら。4

3

9

そうなんですか。どうして？
どうしておうちにいるの？M公園じゃなくて、
例えば学校とかでもなくて、
どうしてお家にいるって決めてくれるの？5

そう、3もね、いるから、
なかなか連れて行けないよ～（笑い）10

高いから

6

明日、今日ここ来るからって言ってね、
話したらね、（・・・中略・・・）
犬が気になってるってことも昨日聞いてね。
そういうことやったらねって話したね。
そうね大事に思っちゃったらね。 11

・・・途中の会話があり、最後の最後に・・・

親

「会話」の内容-その③-

お母さんを心配する気持ちは止まらない・・・

だけど、だけど地震とかで、
お母さんらが逃げれなかったらどうしようって思う

やけん、地震が終わってね、津波が終わったら、津波
が来るかわからんけど、津波が終わったら、それでか
あちゃんがおらんかったら、探すのかなと思った

やっぱりそれは小学校で待ち合わせじゃないけど

うん・・・

(小学校に) 行こうねっていう話やん

うん・・・

子

親

・・・それぞれの場所の立地を地図
で説明し、小学校で合流しようとい
う確認をして、最後に・・・

岡田

地震が終わった、津波が終わった、お母さん
ちょっと見当たらんへん、どうする？

やけん、学校とかN（職場）とか、
探しに行く

え、探しに行く！？それいいと思う？
また津波くるかもしれんで！

「会話」のあとの親の感想

「いやまあざっくりとしていいから、ここ行ってね、次ここ行こうねぐらいの話しかしてなかったから、**なんかあんまりこう、（子が）理解ができてなかったなっていうのがね（今回わかった）」**

「地震が起きたら、みたいな話をするけど、うん。その地震が来たら、こうせないかんでね、とか、帰り道、何があってもランドセル捨ててでも、お金捨ててでも逃げなさい、みたいな話をするけど、場所を一致させるとかそんなんは、、、必要な事かもしれんけど、、、（中略）**結局なんかね、あんまりそんな、親も言いよることとか、あんまり聞いてないね、自分の考えで行動しそう、まだ**」

「**言うは言うんですけど、もしお母さんがどうなっても一人で逃げないかんよって。その時なってみなわからんし。**（中略）1人で逃げるしかないで。先に。とりあえず。ばあば置いても。」

「でももう何か、**こう改めてこうやって確認したことがなかったけん、本人がどこに逃げようと思うちゅうとか、話そんなにしたことないけん**」

てんでんこを実効性のあるものにするために

知識として知っている状態

『「津波てんでんこ」そのものが津波避難に対して大事だ』
ということを知っていて、かつ知っていることは大前提。

避難（避難先）に関する回答
が一致している状態

偶然一致していることも含めて、どこに逃げるという
場所に関する回答が、（客観的に）一致している。

避難（避難先）に関する**相互**
の認識が一致している状態

避難（避難先）に関する相互の認識が一致しており、
さらに、その一致はお互いに決めたことであり、それ
を決めて一致していること自体を相互に知っている。

相互の話し合いを通じて、
継続的に「更新・改定」
し続けていく状態

条件の変化に応じた、選択・決定の更新。

災害時のてんでんこの発動

避難の第一歩を確実に踏み出すために

- 避難できるための“環境”（=大事な人同士の認識の一致）を整える
- 逃げた先で出会いたい大切な人同士で、しっかり決めごとをしておく
- 話し合った、だけでなく「**お互いにお互いが選択するだろう行動をわかっている状態**」をめざす

あなたが「てんでんこ」することを私は信じている
(そうでないと私も「てんでんこ」できない)

話し合ったから、私がどこへ避難するか
あなたは知ってくれている

私が「てんでんこ」することを、あなたは信じている
(そうでないと、あなたは「てんでんこ」できない)

話し合ったから、あなたがきつとどこ
に避難するか、私は想像がつく

「あなたが『てんでんこ』することを、私は信じている」と、
あなたは信じている
(だから、2人とも安心して「てんでんこ」できる)。

「私が『てんでんこ』することを、あなたは信じている」と、
私は信じている
(だから、2人とも安心して「てんでんこ」できる)。